語源について　　第６回

前回に続き生活のなかに密着した言葉を中心に、語源について言葉を洗い出す。
“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。

・軌道に乗る：物事が順調に運ぶ。「軌」は、わだち、あるいは車の通るべき道の意であって、「軌道」は言わばレールのことである。車がレールの上に乗ることであるから、うまく物事が運ぶようになるわけ。「不良化防止運動もようやく軌道に乗ってきた」などと言う。また「軌道に乗せる」とも言う。「やっとのことで都市計画を軌道に乗せた」
なお、レールや道などという特別に作られたものでなくても、「宇宙衛星の軌道」のようにも使う。
・天衣無縫：自然のままで美しいこと。もと、天人の着物には縫い目がないという意。詩文などで、技巧のあとがなく、ごく自然に出来上がっていることのたとえに使う。転じて「彼のふるまいは天衣無縫だ」「天衣無縫ぶりにはほとほと感心する」などと人の性格や行動について使う。
・足が出る：予算では足りなくなる。「やりかたがまずくて足が出てしまった」などと言う。「足を出す」とも言う。「いい気になって使ったものだから大分足を出した」　もと、着物のたけが短くて足が出ることであろうか。
・歴然：明白なさま。はっきりしていること。「歴然たる証拠」「勝敗は歴然としている」のように使う。なお、「歴歴」も明白なさまのこと。「勝算歴歴だ」などと使う。なお、「お歴歴」は、身分の高い人々。あるいは、社会的に名声のある人々や、すぐれた人々意味にも使う。現在では多少からかいの気持ちで「お歴歴のおそろいだ」などと使うことが多い。
・ひとり合点：自分だけわかったつもりになること。「ひとり合点で行動するから、まわりの者が迷惑する」などと言う。「合点」はガテンまたはガッテンと発音する。元来は、和歌などで、すぐれたものに付けるしるしのこと。さらに、回状などに承知の意を表すため自分の名前につけるしるしのことをも言い、転じて、承知の意に使われる。「ひとり合点」は、自分だけ承知していることである。
・合点：承知すること。「合点」はもともと、集まった歌・句の中で、選者・判者がすぐれた作品と認めたものに付けるしるしのこと。
このしるしは、回状などで自分の名の肩に承知の意味で付けるのにも用いられ、転じて「承知」「承諾」の意になり、またうなづくことにも用いられた。
・瓜二つ：非常によく似ていること。「瓜二つ割り」の略であろうか。瓜を二つに割った形がそっくりなところから、たとえば兄弟などの顔つきがひどくよ

く似ていることなどの場合に使う。「彼は兄と瓜二つだ」
・つつぬけ：すぐよそに伝わること。「彼に話したらつつぬけだよ」「情報がつつぬけになる」などと言う。「つつ」は「筒」の意。筒は中が空いているもの。その空いている所を通りぬけるように、話したことがすぐによそにもれてしまうことである。
・私語：ひそひそ話。この場合の「私」は「ひそかに」の意で、「私語」は、ささやくことである。「私語する」と動詞としても使う。「二人は額を寄せて何やら私語していた」「席上での私語はつつしんで欲しい」などという。
・かなでる：音楽を奏する。「バイオリンをかなでる」「琴をかなでる」などと言う。古くは「かなづ」と下二段に活用した。なお、「舞って手を動かす」のも「かなづ」である。「かなでる」は下一段活用。
コトババンクより検索：楽器をかなでるには「奏楽・演奏・合奏・間奏・吹奏・前奏・弾奏・独奏・伴奏」などがある。
・鼓舞する：はげます。人の気をふるい起こさせること。「士気を鼓舞する」と使う。「鼓」はつづみをうつこと、「舞」はもちろんまうことで、音楽や舞で人の気持をはげますのが「鼓舞する」であるが、転じて単に「はげます」の意に用いる用になった。
・きびすを返す：あともどりする。「ただちにきびすを返して帰京した」などと使う。「きびす」は「くびす」とも言われる。足の「かかと」のことである。
なお、「きびす(くびす)を接して」は、続々と、次から次へと、の意。「彼の門下からはすぐれた学者がきびすを接して現れた」
・ごたくを並べる：くどくどと言いたてる。「何が気に入らなかったのか、しきりとごたくを並べる」などと言う。また、他の人がしゃべることをあざけって「ごたくを並べる」と言うこともある。なお、「ごたくを聞かされる」という言いかたもする。「ごたく」は「御託宣」は神が人にのりうつったり夢に現れたりして神意を告げ知らせることであり、いわゆる神のおつげである。
・さばをよむ：数量をごまかす。「年齢はさばをよんで二十九と答えた」などと使う。「さば」は魚の鯖のことで、「よむ」は「かぞえる」の意。魚を数える際、手早く数をかぞえて数をごまかすからと言われる。「さばよみ」という名詞形もある。元来、鯖などは二つを一連としてかぞえたからという説や、魚市場をイサバと言うのでイサバヨミが略されて「さばよみ」が生まれたという説がある。
・だだをこねる：わがままをいう。むずかること。ことに、子供があまえてわがままを言うこと。「だだ」はしばしば「駄駄」と書かれた。「こねる」は元来「どろをこねる」「粉をこねる」の「こねる」である。「だだをこねて手の付けようがない」などと言う。なお、だだをこねる子が「だだっ子」である。

「だだ」は「じだんだ」「じだだ」から変化した語と言われる。「いやだとだだを踏む泥」(雑俳)というのがある。ただし「いやだいやだ」の略かと言う説(大言海)もある。

“語源のたのしみ” 岩渕鋭太郎 著書より抜粋して記載。　　(池田)